星の溶岩

岩井　薫

I

紡錘形をした灰色の実がはぜると、冠毛をつけた種子の塊が一せいに飛び散り、風に乗ってゆく。目路はるか、棘だらけの茎が干涸びた蜥蜴の舌のような尖端を乾いた空気にふるわせる平原に、「星の溶岩」と呼び慣わされた不思議な建築群がある。失墜した星が辛くも地上にその残滓を繋ぎ止めた一点のような外貌から、遍歴者達がそう呼ぶのだ。午後遅くこの都市に到着した無意識界からやって来た使者のような遍歴者は、指差す手を刻んだ拱門をくぐり、曲りくねって奥へ奥へと彼を導く炎の舗道に杖をひき、屹立する尖塔の連なりを見上げる。それから細かく敷きつめられた舗石に足を踏み外した彼は、崩れゆく時間の斜面をすべり落ち、内部へ内部へと深淵を穿たれた地上の迷路が曖昧に翳るのを見ている。

II

――俺の父は建築家だった。祖父もまた建築家だった。この都市の住人の先祖は皆建築家だった。俺の肉体が滅びても果てしなく変化し続けられる連禱にも似たどの命題にも反復される繋辞を見るがよい。

難語辞典を繰りながら迷宮論者がこう言う（彼の背後には洋服を着た大きな野菜の肖像画が掛かっていはしまいか？）……

――それゆえに、この都市の住人は皆建築家だ。生まれてくる者は誰も皆建築家だ。これらの諸命題に共通な短い言葉の下にぽっかりと穴をあけた影こそ、この迷宮の暗い核に他ならない。見

られてはならない影を封じるものとして、目除けの石積みとして、この都市は存在する。

Ⅲ

古い真鍮製の無限記号を吊した木の扉を押して、男は内部へ入った。戸棚にはおびただしい貝殻模型が並び、大小の海産・陸産貝類の堡詰め標本や複製がある。「男物の白いユリ貝が今しがた焼きあがったところさ」と男をちらりと見て青い仕事着の貝殻師は言い、奥の窯から真っ白い釉薬を輝かせた等身大のユリ貝を取り出した。貝殻師は長い鉗子で貝の口から紙粘土製の男の下半身の人型を引き抜き、同じような白い人型が積みあげられている傍らに並べた。「俺もようやく貝男になるのだ」と男は銭を払い、裸になると人型が取り除かれたあとの空隙にすっぽり下半身を嵌め、貝男らしく手でのろのろと這って出て行った。緩やかに弧を描く舗道には、遠くまで点々と貝男・貝女達が背を向けて長い影を落としている。

Ⅳ

七つの舗道の分岐点は沈黙の広場と呼ばれている。沈黙は七つの舗道から集積して広場に澱んだ層をなしているので、広場に面した一番高い塔から俯瞰すると散歩者の群は解散した葬列を思わせる。ある暁方、広場付近の住人は異様な羽搏きの音に眠りを絶たれ、夢の名残りが朝の光の中に溶解して消えると、広場に面した扉の外に三本趾の巨大な足跡が見出された。子細に調べてみると多孔性の石灰質の砂粒が舗石の上に付着している。次の日も、またその次の日も同じような暁の羽搏きが聴かれ、その度に足跡は数を増すのだった。巨大な鳥が一番高い塔を目印に沈黙

の広場に舞い下りて、七つの入り口を持つ迷路めぐりを思案している、あるいは七つの舗道から流れ出てくる沈黙を食べているのだと様々な噂が囁かれたが、誰もその鳥を見ることは出来なかった。

V

球形あるいは円筒形の気密容器（カプセル）の中に閉じ籠もった人体は *ideal* なるものを想起させるが、このような人体を囲繞する小空間への固執が胞胚の対称性への回帰ということで説明されるならば、翼はこれとは逆に非対称の空間へ飛び立つものとして人体の四肢に加えられる。そのようにして、かの塔の画家もまたついに再生し続ける翼手類の翼の獲得に成功したのであろう。もぎ取られても再び回復する翼を羽搏かせて都市の上を旋回し、網の目のように錯綜した舗道を写生する彼の空中散策は驚異と賛嘆の眼差しで見守られた。しかし彼の死によって翼は見棄てられ、塔の屋根裏で蜘蛛の巣に絡めとられたままになっている。翼を再生し飛び立つことが出来る者の不在に対する怒りにも似た侮蔑の表徴として、埃やネズミの糞にまみれながら……。

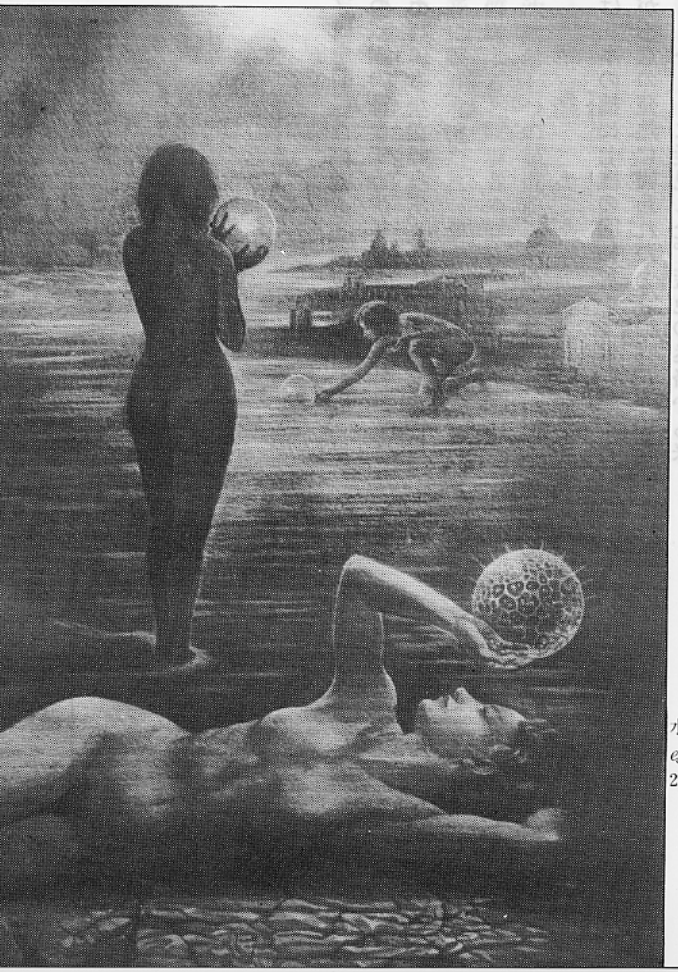
VI

星の墓地をめぐる稲妻の一閃にも似た輝きに照らし出される事物の断片が、未整理の陳列棚のような都市のここかしこに見出される。たとえば子守唄を歌う九本の縄で出来た鞭や、繃帯で幾重にも巻かれて湿る木製の糸巻き、卵形の容器から視線（可視的な光の輻（や）？）を発するおびただしいレンズなどの間には、吸盤だらけの触手を硬直させたまま死んでいる海星（ひとで）、白い腹を見せた

鰐、朽ちた木箱、皺襞を晒された流木、そしてありとあらゆる貝殻さえ散在する。それらは狭い舗道の曲り角や、石段の上、建物の壁がんなどに置かれ、霧の夜など不意に帯電するのか、空の抜け殻を彷徨う水のかけらのように明るく照らし出される。

Ⅶ

見えない思考の輪郭をなぞるように舗道をたどる者は必ず既視感に襲われる、青磁色の空間に突然出現した解読不能の星界通信のようにそびえる松毬の形をした巨大な塔。その螺旋の回廊をめぐれば、翳った眼差しがはるか向うでさし招く。心臓のない塔で思いがけず自分の心臓を探り当てたように驚いて開けた小箱は、内側にびっしりと錆びた釘を生やしている。「俺の悪意ではない。おまえの記憶に巣う不安の昆虫がそんな夢を見せるのだ」と塔の番人はむしろ同情的に言



水津燧　セイレーンに
egg tempera
23.3×16.5*cm*

う。大きな帽子と外衣（マント）を壁に並べて掛け、パンとスープ皿を前に長い食卓を囲んだ番人の一族（誰もが何かの番をしているのだ）は彼に空席をすすめ、鍋の番をする少年は彼の名前の頭文字が入ったスープ皿にキノコのスープを分けて与える。それにもかかわらず、スープの中は楕円形の不安の沼。

Ⅷ

枯葉色の年代記によれば、この都市の住人の先祖達は三本の檣（マスト）に七機の回転翼をつけた船で月の航跡を追うて旅をしていた。ある時、檣楼の見張りが不意の発熱に襲われたように叫び、甲板に集まった人々は藍色の空の果てを恐怖の深淵でも覗きこむように凝視した。藍色の迷路から来るのは天使か鳥か？　流れる午後の雲に見え隠れして、雲間を彷徨う悪夢の記号のような巨大な手が空を横切って出現し、そして静かに地上の一点を指差し続け、人々の視線の果てに吸い込まれるように消えた。人々は手が指差した地上の一点に着陸すると、そこに隕墜した星の残骸のような都市の礎を築き、拱門の上に「指差す手」を刻んで紋章としたという。